用候、

六月

右之趣、葵御紋相用候大名江可被相達候、

〔天明集成絲綸錄二十八〕明和五子年六月

寺社奉行江

諸寺社神事佛事開帳等、其外平生共、葵御紋附候品者、向後御女中樣方よりも容易御寄附無之、御三家始、其外大名よりも菩提所等は格別、其外江者寄附無之筈候、是迄御寄附、幷寄附之分は、什物ニ致置、平生は勿論、神事佛事開帳等之節も、相用候儀可爲無用候、尤葵御紋相用候面々、靈牌等有之、寺院江相納候膳具、其外打敷等御紋附候品、其人之法用ニ相用候儀者不苦候、

右之趣、諸寺社江可被申渡候、

〔天明集成絲綸錄三十一〕安永九子年八月

寺社奉行江

葵御紋附之儀ニ付、先達而書付帳面を以被申聞候内、城州東山淨土宗一心院本堂本尊前ニ掛有之候、葵菊之紋、緣ニ附有之候額之儀、以來は什物ニ致置、相用申間敷旨、京都町奉行とも申渡候由、然處右一心院は、知恩院宮菩提所ニ而、前御門主尊胤親王染筆奉納之儀ニ而、年來相用候處、今更取置候而は、尊胤親王染筆之譯も不相立候ニ付、何卒是迄之通、被差置度旨被申立候趣、久世出雲守より申越候ニ付、右者是迄之通、被差置候樣ニと出雲守江相達候、尤知恩院宮を始、此以後之例ニは不成、其外之例ニは、猶更難相成候、則右之趣出雲守江茂相達候間、是又可被得其意候、

〔享保集成絲綸錄十九〕元祿十六未年十二月

覺